海外の動き

オーストラリアの老人施設視察見学記

力丸　のり子
（品川総合福祉センター）

はじめに

オーストラリアは大陸としては世界最小，島としては世界最大の，建国200年の若いくにであり，ヨーロッパの伝統と大自然が融合する国であり，コアラとカンガルーの国として知られている。

オーストラリアは六つの州と二つの特別地域から成っている州立政府で，各州に英国の女王を代表する総督がおり，独自の首相と議会をもつ国である。

赤道を中心に，ほぼ同じ距離に日本とオーストラリアは位置しており，その時間差は1時間，オーストラリアの方が早い。四季は北半球の日本と正反対で，日本が冬なら，オーストラリアは夏である。

1788年，英国の探検家キャプテン・クックによりオーストラリア大陸は発見され，ボタニー港（今日のシドニー）に最初の植民団が送り込まれた。以来ヨーロッパからの労働者移民を受け入れて作りあげた国で，今日では現住民のアボリジニは約30万人にすぎないといわれている。国の総面積は日本の22倍，人口は東京都の人口を多少上まわる約1,600万人位である。

生活水準は日本の平均的サラリーマンの収入とそれ程の差はないが，食品が安いため生活し易い。ただし人件費が高いため，細工もの等，人の手を加えたものについては高価である。労働に関しては，休息時間，休みはゆったりとるようで，祝日・休日等は，全ての商店・デパートは休業。地下鉄すらも止まるほどで，かろうじて観光客向けの店，免税店等が開店している位である。

広大な緑の大地，青い空とエメラルド色に輝く海，ゆったりと草を喰む羊，牛，馬。果てしなく続くユーカリの林。美しく手入れされた公園と町のそこここに立ち並ぶ教会の尖塔。そして陽気で解放的な，しかしアングリカンの誇りを湛えた大らかな人々。このオーストラリアにある福祉施設の視察旅行は，昨年6月，7日間にわたって行われ，施設職員等16名が参加した。

訪れた施設は，老人，障害者，幼児など，各各種別の異なった5つの施設であるが，紙面の都合上，最初の訪問先の老人施設をご紹介したい。

オーストラリアの老人の生活様式

さてオーストラリアでは，あらゆる世代

にわたって各々独立した生活を営むという意識が発達しており，子供たちと同居して老後をすごすことはまれである。家族を愛し交流は密であるが，原則として別々に暮らすことを好む。夫婦の片方が亡くなったとしても，ひとりになった老人は福祉サービスを活用しながらひとりで暮らし，身体上の不安が生じた場合，いざというときに医療やケアサービスの備えのあるホステルや老人用アパートに移る。

オーストラリアの老人は自立心が旺盛で，親族による扶養に頼るよりも，経済的には年金を利用しながら社会的な援助を受け，自立生活をすることを前提としている。またプライバシーを重んじ，集団生活を望まず，様々なタイプの自立生活施設が地域社会に用意され，老人自身が自分の好む生活様式を選択できるようになっている。

こうして作られた老人施設のタイプは，食堂やレクリエーション部分を他人と共有するホステル。住宅機能のすべてを内蔵させた小住宅の集団住宅。老人アパート及び家族同伴老人アパートなどがあり，これらは一般地域社会からかけ離れたものでなく，一般社会との交流をもち，普通の生活と変わりないように運営することを原則としているという。

また，施設利用の老人で個人的介護サービス（食事づくり，入浴，衣服着脱，洗濯，清掃等）が必要な場合，これらのサービスを行う公認団体は連邦政府に申請して，個人的介護の補助金を受けて，施設内サービスの拡充をはかっている。

その他給食サービスも盛んで，公認された地域の団体が，巡回車で老人のいる各戸に温かい食事を届けるサービスを実施している地域が多い，そのため連邦政府は給食補助金法を1970年に設定し，資金補助を出している。

またオーストラリアは「国民福祉のパイオニア」と呼ばれ，老齢年金をいち早く採用した国で，男子65歳，女子60歳になると受給できるが，定期収入がなく，その年齢に至るまでの間通算10年以上在豪の者に与えられる無拠出の年金である。移民，その他国際的な移動の激しいお国柄を反映しているわけで，定着型のわが国に比べると珍らしい。

以上のことを念頭におきながら，シドニーにある民営の高齢者のための総合施設を見学することになった。

地域の中の老人村：「アングリカン・リタイアメント・ビレッジ」

シドニーの中心街から車で1時間ほど走ったところに老人の総合施設，アングリカン・リタイアメント・ビレッジがある。広大な敷地，起伏の多い，そして緑豊かな中に様々な形の建物が点在している。

アングリカン・リタイアメイト・ビレッジは，第二次世界大戦中，シドニーの英国国教会の大主教の妻ドロシー・A・モウル夫人が聖職者や教会の従業員たちの老後対策について考えたことから始まる。当時、長年教会に仕えた人々の中に多くの未亡人や独身の高齢者がおり，この人たちが安心して老後を送れる“教会退役者の村”づく

アングリカン・リタイアメント・ビレッジの利用料

住宅形態	入居時の費用	管理費（週）
セルフケアユニット（一戸建，自立生活を営んでいる）	単身者用 184～ 605 万円	3,890～7,920円 含 各種保険，建物設備メンテナンス料
	夫婦用 660～1,200 万円	
ホステル（アパート形式，部分的なケアが希望に応じて受けられる）	単身者用 275～ 550 万円	26,180円 含 ケア・サービス料
	夫婦用 407～ 770 万円	

＊ 自動車駐車料 週240～260円 1豪ドル120円で換算

りが構想され，それが今日のリタイアメント・ビレッジの芽をつくった。

1955年，夫人の考えに賛同したモウル大主教は英国国教会にホーム建設を起案。夫人が57年に死去したが，その意思を継いで建設の具体化と募金活動に力を注ぎ，翌58年，キャッスル・ヒルにある非常に見晴らしのよい土地47万m²を購入することを決めた。その3日後モウル大主教も死去した。しかしその後モウル夫妻の意志をついだ多くの人々の手によって，1960年に最初のホームを完成，モウル夫妻に因んでモウル・メモリアル・ビレッジと名づけられ，5名が入居，1名の寮母が配属されて，食事，掃除などの世話を始めた。これがアングリカン・リタイアメント・ビレッジの基礎となったのである。

やがて，次第に施設は拡大され，様々なホステルやナーシングホーム等が建設され，教会はもとより生活に必要なあらゆる施設が付設され，現在では17のビレッジと5つのナーシングホームがあり，約3,500人の老人たちが生活しており，ソーシャルワーカー，看護婦，事務員，給食その他の職員，そしてチャプレン（牧師）等900人のスタッフが働く巨大な施設群をつくっている。

4種類の老人の家とサービスシステム

しかし，というよりも，にもかかわらずといった方がよいかも知れないが，オーストラリアでも老人の問題は深刻である。退役後の人生こそ最もすばらしいものでありたい。それには身体，感情，社会的要求，すべてが充足される環境が整えられ，落ち着いて安心できる生活がしたい。自由と独立と満足が与えられる豊かな老後をという老人たちのニーズに応えなければならない。施設サービスが単一であってはならないわけである。

リタイアメント・ビレッジはこうしたことをふまえて，残された人生のために必要なケアをしながら，老人のもつあらゆる可能性を生かすチャンスを与えることを目標にしていた。そしてサービスが単一にならないためにも，次の4つのタイプの住居とサービスを提供していた。ということは，わが国では数少ない有料老人ホームの形態をとるわけである。

“セルフケア・ユニット”は一戸建て住宅で，単身者用と夫婦用の二種類がある。個人が自由に家庭生活を営めるようにというものであり，料理，洗濯など家事のいっさいを自分たちで行い，電気代・水道代も自己負担する。ただし，補修と管理などはビレッジ側で行う様になっている。

“ホステル”はアパート形式の住居で，食事や洗濯など家事については，希望に応じて部分的なケアが受けられる。

“ナーシングホーム”は，身体が不自由で全面的なケアが必要になった老人のため

の施設で，日本の特別養護老人ホームにあたると思うが，夫婦のどちらかがそうなった場合でも，残された一方の人も一緒に生活できるよう配慮されており，わが国の“分類収容”の形とは格段の差であった。

それらの住居には冷蔵庫，カーテン，じゅうたんが備えられているが，家具は自分たちが永年使い慣れた愛着のあるものなど，好きなものが持ち込めるようになっており，カーテンなども自分の好みでとりかえることもできる。また入居者のすべてに対して小さな庭が与えられ，好きなように花など植えられていた。

ここで生活する人たちには希望によりシーツ等の洗濯，食事の仕事，その他家事労働のサービスが行われるシステムがある。また身体的に不自由な老人のため何から何までサービスが受けられる特別ケアサービスのシステム，社会復帰システムと称して，老人たちの制作した作品を施設のもつ流通機構によって販売し，その利益を老人たちに還元するシステムがある。コミュニケーション・システムではゲーム室の開放や文化講座，勉強会，手工芸指導，レストラン，バー，売店，教会，図書室などが設備され，自由な交流が行われていた。

入居資格と入居の費用

リタイヤメント・ビレッジは英国国教会が経営しており，入居資格は男65歳，女60歳以上（夫婦の場合はどちらかが年齢に達していればよい）健康で日常の生活が自立し，人間的に特に問題がないことになっている。ただし入居後に健康を害してケアが必要になった場合には，前述のように部分的にケアサービスを受けることも，ナーシングホームに移ることも可能であるし，希望する限り終生ビレッジの住民であることも可能である。見学当時100歳以上の超高齢者が31名もいるということだった。

宗教は問わないが，入居後は英国国教会の慣習のもとに生活することに同意することが条件になっている。

入居時等の費用は別表のとおりで，分譲ではなく保証金という考えに近く，退所するときには滞在年数に応じたパーセンテージで払い戻されるが，一般にシドニーで家を持っている人が売却すると720万円くらいなので，一戸建てユニットの500～600万円はさほど高いとはいえない。一方，資産がなく支払いが困難な場合は免除されるが，30％近い人たちがこの措置を受けているという。

ビレッジの情景

何しろ広大な敷地の中に様々な形の建物が点在し，全てを見学することが困難なので，リタイアメント・ビレッジの出発点となったモウル・メモリアル・ビレッジを中心に，ビレッジ所有のマイクロバスで見学が進められた。案内はミセス・オークウェルで，夫とともにこのビレッジに入居しているひとりである。ここでは元気であれば，希望に応じて入居もビレッジの中で働くこともでき，一般職員と同様給与が支払われる。

17のビレッジの中心に本部があり，そこではすべてコンピューターで情報処理がなされていた。本部を通過すると，緑のあいまにホステルが立ち並び，次いで1,800人の食事を用意しているという調理場が見えてきた。調理は各ビレッジの集中方式で行われ，各ホステルに運ばれたものをキッチンで専任の職員が配膳し，下膳，食器洗浄もそこで行うという。

マイクロバスから見る景色は，冬というのに緑あざやかな中に美しい花々が咲き乱れ，ときどき紅葉した木々が混じるが，花々の色合いは春のようで目をみはる美しさであった。そうした中に一戸建ての家やホステル，教会などが点在し，美しい調和をつくっている。

グランドでは白いユニフォームの老人たちがクリケットに興じていた。オーストラリアでは60歳以上の人がスポーツをする時・白いユニフォームを着るのだという。バスの中の私たちに手を振ってあいさつしてくれた。

やがてナッフィールド・ビレッジと呼ばれるところに到着，150人が住むホステルに案内された。各ホステルにチャペル，売店，理容室，図書室，手工芸室などがあり，図書室には大活字本がずらりと並べられていた。

また各所に大きな掲示板があり，情報交換の大事な場所となっているようである。

食堂では常時紅茶とクッキーのサービスが受けられ，お茶を飲みながら楽しげに話合っているグループが何組かいた。私たちも案内のオークウェル夫人の紹介で話の仲間に入れてもらった。

「ここはすばらしい，そしてたのしい。退屈しない。」と満足げに語ってくれたし，「オーストラリアはすばらしい国だ」と祖国を誇らしげに語り，日本からの客にねぎらいのことばをかけてくれるお婆さんたちだった。温かい大きな手とにこやかな笑顔，そして明るい表情がすばらしかった。

他の施設でもそうであったが，ここでもプライバシーはかたく守られ，写真撮影も自由にできなかったし，居室を見せていただくことも難しかった。しかし一緒にお茶のみ話しをした老婦人のひとりが，「よろしかったら私の部屋をどうぞ」と快く引き受けてくれ，特別に彼女の部屋をみせていただくことになった。

それはホステルの中にある２ＤＫで，小さなバスルームとベランダがついており，部屋はきちんと片づけられていた。壁に面してドレッサーが置いてあり，そこには家族の写真が飾られ，小型のサイドボードには，きれいな食器が形良く並び，その間に小物や絵が飾られていた。ベッドルームも整頓され，ピンクのベッドカバーは若い女の子の部屋を思わせる可愛らしい雰囲気に整えられていた。無駄なものはひとつもなく，ひとつひとつのインテリアに心配りがうかがわれ，居住者の人柄がうかがわれた。

家族，友人等の面会は割りに頻繁に行われ，共に食事をすることもでき，宿泊の設備も整っている。ビレッジ内は15分おきに巡回バスが走り，さらに市内を走る路線バスも乗り入れており，自由に外出ができ，交通の便には恵まれている。

あっという間に1時間が過ぎた。ほんの一部しか見ることができなかったが，老人たちの明るい，生き生きとした表情と，目のさめるような自然の色彩り，そして館内に飾られた額絵，花々が強い印象として残った。

最後に，案内のオークウェルさんに入居の動機をたずねるとこう話してくれた。

「私たち夫婦がこのビレッジに入るようになった動機は，退職後の人生を豊かに過ごしたいからでした。私たちには娘と二人の息子があり，子どもたちを何者にもまさって愛しており，彼らも私どもを愛しています。息子たちのどちらかと一緒に暮らすことも可能でしたが，そうすると孫の世話やその他の仕事が課せられ，自分たちの自由な時間が失われてしまいます。それに自分たちが年をとって身体が不自由になったとき，今度は子どもたちが自分たちのケアをすることになり，彼らの自由を束縛することになります。お互いが束縛されないため，私たちは自分たちの生活を大事にするため，このビレッジに入居することを選んだのです。

ここではそれぞれの役割りや仕事もあり，しかもプライバシーも守られ快適な暮らしをしています。オーストラリアの老人は子どもに依存することを好まないし，独立心旺盛で自らの生活を大事にします。私もここの生活を選んでよかったと思います。」

オークウエル夫人のことばの中に，オーストラリア人の生き方がうかがわれる。

終わりに

私たちの見学した施設は，以上のように健康な老人のための住宅からケアサービス付きの集合住宅，そして介護の必要になった老人のためのナーシングホームと，一環した総合的な老人施設である。そこに住む老人たちのきちんとした身だしなみと，明るい笑顔が印象的だった。

さて，オーストラリアはオセオニアにおいて，経済と福祉が最もバランスある調和をもって発展してきた国であると言われている。また，所得保障だけではみたされない老人や障害者のトータルなニーズに応えるため，住宅や近隣の生活空間を含めて，生活圏から障害を取り除くよう物理的な面での取り組みもなされている。そしてできる限り，老人も障害者も，自らの能力を最大限に生かす場を地域社会の中に求めていく。

しかし，現在オーストラリアには，現代工業化社会の進展において，その技術革新についていけなかった原住民や移民，更に一般労働者間におきている失業問題など，そのかかえている問題も大きいと聞いている。

夜空にくっきりと刻まれた南十字星と星空の大パノラマ，広々とした牧場と高い空，数多くある公園，まっ白な砂浜とサーフィンを楽しむ若者たち……。研修のあい間にみるオーストラリアはのどやかで美しい。

一日の勤務(つとめ)を終え，太陽が水平線から姿を消した頃，残光を浴びた小さな波とともに，ペンギンの群れが波打ちぎわに立ち上

がり，巣に向かって可愛いパレードが始まる。道の両側に群れを驚かせまいと，道をあけてじっとかたずをのんで見守る人々の優しい目。また動物園ではぬいぐるみのようなコアラを，大事にそっと抱くときのやわらかな表情。旅行中で最もやさしいいたわりにみち，ふと心なごむ情景でもあった。

こうしてオーストラリアの旅を終えたが，異なった文化，そしてその文化の生み出した施設を訪れることによって多くの発見をした。今後は日本の福祉の立場にかえって考えてみたいと思う。新しいことを知るだけでなく，知ることによってさらに自分に返ってきた問題を認識でき，有意義な旅だったとおもう。